
俺伝説～超能力英雄伝～2 二人の少女と魔法と二度目の世界

俺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺伝説～超能力英雄伝～2 一人の少女と魔法と二度目の世界

【Zコード】

N7837L

【作者名】

俺

【あらすじ】

一人の英雄の物語から10年。

英雄の手によつて変えられたその世界での超能力者は
その当時の3%ほどまで減つていた。
とある日曜日。秋葉原。

そこで一人の少女と一人の男が出会い。

そして欠けた歯車が埋まり物語はまた動き出す。

～序章～再起動（前書き）

まず謝罪を。非情に申し訳ないのですがこの物語、中途半端な事に一巻からスタートしています。そのためいろいろと理解できない設定が出てきますがそこはご了承ください
あとこの作品。今のところはまだグロテスクな表現は出ませんがこの後多々出る予定ですので注意してください。
もしそれでも読んでいただけるのならどうぞお楽しみください。

東京、秋葉原。日曜日。そこには多くの人がいた。そこには小さな電化製品店に交じつて多くの玩具店が並ぶ。しかしその内容は『常人むけ』とは言えない。

そのターゲットはオタクやマニアと呼ばれる人々に絞ったものなどが多い。その人たちはつい最近まで悪い見られ方しかされていなかつたものの、一人の男が見事にその人たちの大半をまとめ上げ、演説などで支持を集めそれを日本中に広げ今まで疎外されていたその人たちの評価を上げて行つた。

今では常人と同じ扱いになるまでにもなつていて、今現在もその人物を含め評価は上がる一方だつた。

その秋葉原。その人ごみの中を歩く一人の少女がいた。一人は短髪でボーグ・イッシュな印象を受ける少女。もう一人は後ろで髪を束ねていた。普通に言うポニー・テールだ。

そのポニー・テールの子が短髪の子に手をひっぱられどんどんと人気のない路地裏へと進んで行く。その路地裏。勘だけでたどり着いたその場所は道が前、3、4mだけがひらけて四角いスペースができていた。どこかの店の裏口らしい。

短髪の少女はふと何かを感じ取り自分の左横を見る。そこには予想もしなかつた一人の男が

いた。その男は二十歳くらいで短髪。周りでよく見るような服を着ていた。腰を抜かしその少

女はそこに腰をおろしてしまつ。その男は手を差し伸べる。

「大丈夫？」男はからつぽの笑顔を浮かべながら言う。

「あ・・・」そう言い短髪の少女はその男の手を握り立ち上がる。それを確認すると男はその少女に話しかける。

「ちょっと話したいい？」

短髪の少女はその言葉に対して頷く。それとほぼ同時。後ろの道から少し遅れてポニー・テールの少女が出てくる。しかしその少女は後ろでただ啞然とし、驚いている。

「魔法つてあると思つ?」馬鹿げた質問だった。魔法など童話やゲームなどに出てくる架空の物事と決めつけているその世界では。しかし男は表情をほほえずに言つ。だがそれが馬鹿にして言われた事じゃないのはなんとなくわかった。

「それつて、ゲームやアニメに出てくる、あれ?」

「まーそれと同じようなものかな?」

「あつたらい」とは思うけど、少女はその時思つた事をただ答えていた。

その少女は今現在、不登校の高校生。そして今、少女はネットで知り合つたその少女と出かけていたところだった。

中学校でいじめにあい、中3からずっと引きこもつていたその少女。その間、自分の寂しさを埋めるためかアニメや小説、漫画と言つた物語にどっぷりとつかつて行つた。

そしてその少女にとつては魔法と言つのは Pやレベル次第で何でもできるものだった。しかしそんなものが現実に無い事。あると信じたても、信じられないくらいの思考はあつた。だからこそ出てきたのがその答えだった。

「じゃあ、その魔法がホントにあつて、君にその才能があつたとしたらどうする?」

「魔法の才能?」

「そう。魔法の才能。もし魔法を使いたいと思つたならここに行けばいい」そう言いながらその男は短髪の少女に名刺サイズの厚紙に地図と住所と電話番号が書かれたものを渡した。「何の苦労もなしにつてわけには行かないし、時間もかかる。だけど君はすごい魔法使いになれる才能を持つている。その魔法を覚えればゲームや漫画までは行かないけど結構便利に使えるはずだよ?」

「ホントに!」短髪の少女は嬉しそうに言つ。この少女は生活が便

利になることがうれしかったわけではない。ただ単に魔法が本当にあつて自分にその才能がある事がうれしかった。

「もちろんさ。ちょっと手、出してくれる?」その時、全く関係ないその言葉が男の口から出てきた。

しかし少女は何も考えずその言葉に従い右手、手のひらを上にして差し出した。

男はその上に自分の片手をかざす。

「つ!」その少女の右手に痛みが走った。それとほぼ同時に手を自分の体に引き戻す。注射の時のような痛みだった。しかしそれよりも軽い痛み。ただ単にびっくりしてその声が出ていた。

「おまじないだ。体には何も起こらないから安心していいはず。ま、魔法つかうようになつたらまた会うだろ?」じゃ」そう言い男は歩き出した。

「まつて!」それを短髪の少女は止める。男は止まり後ろを振り返る。それを見て少女は言った「名前は?」

男はそれに応え得ながら首を正面に戻す。「僕は圭二。けいじ高瀬圭二だ。」その時ちょうど見えなくなつていた圭二の表情が一瞬、崩れた気がした。

そして圭二は歩き出し、大きな通りに出ですぐ曲がつて行つた。そこにいた少女一人はしばらく動かなかつた。そして3分くらいしてかポニーテールの少女がもう一人の少女に話しかける。

「よかつたねー?圭二さんに話しかけられるなんてつ」悔しそうに笑いながらその子はもう一人の子の背中をたたく。それと同時に『パンッ』と言ひ音が響く。

「たつ?」

まるでその状況を理解していない短髪の少女は『何が?』と言ひ顔して言葉を返さない。

「『たつ?』じゃないよ?圭二さんだよーあの人。」

「んー?」

「よくテレビとかにも出てるのに、知らないの?」

「知らないよー。それよりもここへ行つてみよう?」 そう言しながら短髪の少女はさつき圭一にもらつた厚紙を見せる。

「んー今から?」

「うん!」

「しようがないね、いくか」 その声は今までと違ひだいぶ低かつた。下がり始めていた。

そしてその一人の少女はその厚紙に書かれた場所へ向かう。この出来事を境に欠けていた歯車が埋まり世界は動き始める。新たな物語を語るために。

序章 再起動（後書き）

楽しかった。もし、そう思つたのなら。
続きを読みたい。もし、そう思つたのなら。
自作を期待して待つていてください。
絶対だします。だからもう少し待つてほしい。
いつ出すかは解りません。次は面白く仕上がるかさえ解りません。
しかし続きは絶対だします。その時はなにとぞ・・・

第一章～少女・魔法・魔術（前書き）

「一人の少女はある高級マンションの田の前にいた。
「いー、だよね？」

そう言つた短髪の少女の隣ではポニー・テールの少女がマンションの階数を数えていた。が、途中でやめる。どこを数えたのか解らなくなつたからだ。

「高いな」

その言葉を聞いた時、短髪の少女は思つ。『さつきと全然違う。そんなすごい人だつたのかなー？』「うん・・・」別の事を考えていたからなのか素つ氣無い返事になつてしまつていていたのが解つた。数秒、二人の間から会話が途切れる。その間、一人の頭の中ではいろいろな思考が渦巻いていた。だからかその間、徐々に次の言葉が出しにくくなつて行くのが解つた。

「行こう？」完全に何も言えなくなる前に。と、短髪のその子が言う。

「そうだな」そう言いポニー・テールの子は歩き始めた。それについて行くようにもう一人の子が歩き出す。

当然、1分とかからずにそのマンションの入り口につく。そして自動ドアをくぐる。そこはポストとかがあるあのスペース。はつきり言つて無意味に広い。ポストの正面の壁には管理人室と立札を貼つた窓があるがカーテンが閉まつている。短髪の少女が奥とそこを区切る自動ドアの正面、真ん前に立つ。しかしどアはピクリとも動かない。上半身を左右に曲げてみたりジャンプしたりしているがやはりその扉は開かない。

「これ・・・」さつきと同じような声色でポニー・テールのその少女はもう一人の少女に言つ。その声に気づき短髪の少女はその少女の方を向く。その少女の前には部屋番号を入力するタイプの呼鈴があ

つた。

短髪の少女は顔を真っ赤にし、動かなくなる。まるで時間が止まつたかのように一人とも動かない。

「部屋番号、わかる?」ポニー・テールの少女の低い声がその息の詰まるようなその沈黙を崩す。

「えつと」そう言いながら短髪の少女はポケットからさつき圭一にもらつた厚紙を取り出す。「506号室だつて。そこで出てきた人に『圭一』の紹介だ』つて言えだつて」

「わかつた」そう言いながらその少女は部屋番号を入力し始めた。

『はいーどーなーたー』

女の声だった。その声は陽気にスピーカー越しに話しかけてくる。「あの、圭一さんにここへ行けば魔法教えてもらえるつて聞いたんですけど・・・」そう言つているところを見ると、その少女はここまで見る限り乗り気じやなかつたのがただ単に感情を表に出してなかつただけと言う事が何なとなく伝わつてくる。少しでも魔法に興味があつたからこそここまで来たのだろう。

「圭一の知り合いー?今、開けるから部屋まで来てねー?」

そのスピーカーからブツと言つ受信を切つた音が聞こえた。それとほぼ同時にさつきの自動ドアが開く。

「いくぞ?」横に突つ立っている短髪の少女にそう声をかける。

その少女について行くようにもう一人の少女は歩きはじめる。

エレベーターに乗つて階数選択用のボタンをポニー・テールの少女が押したときだった。

「ねー」その言葉を聞いた頃からエレベーターが動き出す。小さな音と同時に空気が重くなつたよつなそんな感覚を受ける。

「?」

「鈴ちゃんてさ、ブログの時と全然」それを言つくる前にポニー・テールの少女、鈴は言つ。

「それは人として言つてはいけない事だ。この後、できるなら言わないで。あともう着く」眞面目な表情。短髪の少女の方は向かず、

そう言つていた。

その階につくと機械音と同時に扉が開く。そして一人は歩き出した。

「「」一まるひく、「」一まるひく」 そう言ひながら短髪の少女は部屋のプレートを見ながら奥へ進む。

「あつたよー」 そう言ひ短髪の鈴は少女の方を向く。そして動かなくなる。1分くらいしても両方とも全く動かない。そこで短髪の少女が話しかける「なんでこっち来ないの？」

「うん」 そう言ひ鈴は歩き出した。

そしてドアの前で鈴は足を止め、方向をその506号室のドアへ向ける。そしてまた一人の動きが止まる。

「呼鈴・・・」 なんとなく迷つているような、そんな口ぶりだった。「なぜ、そこで私に？」 そう言ひた鈴の顔を見て短髪の少女は呼鈴を鳴らす。

『はーいーー』 ドアの内側からそんな声が聞こえてくる。

ガチンと音と同時に扉の鍵が開く。それとほぼ同時にその扉が開き20代の女が出てくる。茶髪で凄い美人だった。『ナイスバティ』 だつた。しかしそこに男はいない。当然か誰もそれには反応しなかつた。

「圭二の知り合いの人だよね？ 中、入つて？」

一人は招かれるままその部屋へ入つて行く。進むとそこにはリビングがあつた。そこは立体的な構造になつていて普通の一軒家と比べても2倍近くの広さがあつた。

一人の少女は部屋のほぼ中心に置いてあるソファーに座るよう指示される。さつきの女はそれを指示すると別の部屋に入つて行つた。

短髪の少女はそのソファーに座ると周りを見回す。「ねーねー鈴ちゃん？」

「なに？」

「すゞつぐみによーー！」

「そうだね。」ただ声に何の変化もつけず鈴はそう言つ。

「……」短髪の少女は次の言葉を口にすることができなかつた。数分の間。その部屋で会話は完全に途切れ、外のバイクや自動車のエンジン音などしか聞こえなくなる。

そしてその数分が過ぎたころ。一人が入ってきたリビングの出入り口の方からから『ドタドタ』と誰かが走つて来るような、そんな物音が聞こえてくる。

二人の少女が入ってきたリビングの出入り口から今度はさつきの女が部屋に入つてくる。「えつとー・・・圭二から何か預かってない?」一人のいるソファーに近寄りながら。歩きながらその女は話しかける。

それを聞き短髪の少女はポケットの中を手さぐりで何かを探し始める。それとほぼ同時にその少女には他の一人の目線が向いた。

一分後。ポケットを手さぐりで探る、焦りきついていた短髪の少女の顔から笑みが映る。完全な沈黙だつたその約一分間。誰も何も言えなく、妙に長く感じたその沈黙。それを短髪のその少女の笑顔が、その動作が完全に緊迫しきつていたその部屋の空気をまるでいつも自分がいるその場所のようなそんな物へと変えた。

「はい!これ、圭二つて人からもらいました!」そう言いながらさつき圭二にもらつた名刺サイズのその厚紙をその女に差し出す。女はそれを左手で受け取る。それを裏返したり扇いだりして調べる。その後にその女はその厚紙に手をかざした。

そうするとその厚紙が青白く光り。一度全体が光つたように見えたが光が徐々に收まり始める。しかし一定の場所だけは光を保ち続けているのが解る。一人の少女の方から見ると左右が逆になり読みにくいか、そこにはしっかりとした文字が浮かび上がつた。

その目の前の二人は僕ん弟子だから面倒見といて
あとそのうち顔見せるからその事あの『お嬢様方』によろしく言つ
といて

その文章に目を通すと女は「勝手だなー」とつぶやき苦笑いをする。「圭一来るまで君たちの面倒見てて書いてあるけど」その厚紙を差し出し言つ。美希はそれを受け取る。少しその言葉が止まつた5秒ほどだ。だけどそれを長く感じたのはなぜだろ?。「ここに寝泊まりでもする?」正面の一人の顔を見、首をかしげながらそう言った。

「しません。私は『魔法』を教わりにきたんです。」一要は敬語。しかし口調は変わらない。しかしさつとき言葉は故意に出てきた物ではなく自然に出てきた物。いわゆる天然だ。しかしその事を一人が知るのはまだいいぶ後の事。

「弟子つてそつちのことかー」照れながら頭の後ろを書きながらそんな事を言った。

『なんだと思つてたんだよ』この人は!』言葉には出さない。だが鈴は疑問と警戒と、あと少しの好奇心。それを持つて確かに心で怒鳴つている。

「そう言えば自己紹介まだだつたね?私は圭一。加羅鎌圭一ちんだよろしく!」

「鈴です。よろしくお願ひします。」
「わたしは美希!これからよろしくお願ひします!」ポニー・テールの少女はそう名乗る。

三人の頭の中本人の頭の中にさえ『あれ?』と言う言葉と違和感が湧く。中途半端に敬語が混ざっていた。しかし誰も突つ込まない。だけど次の言葉も出てこない。この三人の考えている事に大差はない。だがそれを誰も口には出さない。

そんな沈黙の中で美希の方からぐーとまるでアニメに出てくるかのようなそんな音が聞こえた。美希は顔を赤くし苦笑いをしながら両手を腹に当てる。

「えーと」圭が『困った』。そう表情を浮かべた。「お昼ご飯食べ

る？」

美希は照れながら、はい。と答える。

壱はそれを聞きソファーから立ち上がり一人の座っている場所からは陰かげになつて見えな

いキッチンへ向かう。そして冷蔵庫を開け言つ。「あつれー？からつぱだ 買いに行かなきやないよね・・・」壱が陰から一人に対し顔だけが見えるように出し、続けて問つ。「手伝ってくれる？」「はあ。」答えたのは鈴の方。

2

三分後。美希はまるでその上機嫌を体で表すかのようにスキップをしながら一方4、5mの道路が一車線しかないその道を近くの大通りの中にあるスーパーに向け進む。当然そこには壱と鈴もいる。しかし考へている事はみなバラバラだ。

圭一の事を考へている奴、ただ単に喜んでる奴、そして一人は何も考へてさえいない。目的地は一緒なのにここまで方向性までもがバラバラだとある意味凄い気もする。

「おつひーる！おつひーる！おつひーいーるーはーん！」美希が歌い始める。まるで野球などでよく応援などに使われるそんな感じのテンポ。しかしそれは一分と続かずに途切れ。

三人の行く前方。まさにその大通りのあたりから、轟音じゅうおん。そうとしか言いようのない音が聞こえた。それとほぼ同時に歌が途切れれた。その後、一秒と空けずに風が吹く。両側を数10mあるビルに挟まれているその道をコンクリートの粉末を含んだ爆風が。

「え？」壱はそれに気づき一瞬で理解する。その時思わず言葉を漏らした。しかし最低限の事。自分の顔を守るために腕を顔に当てる。しかし他の一人はできずその粉末が目に入る。その粉末が目に入ったことに対する声を上げる。

「たつ？」
「んつ！」

目が痛いのだろう。一人とも両手で痛みの原因の粉末をこり取ろうと目をこすっていた。

爆風自体はたいしたほどでもない。日常で起こってもおかしくないくらいの風の強さ。しかしそれでもまとまっているコンクリートの粉末を飛ばすくらいの力はあった。しかし不思議な事に人の悲鳴や逃げるその姿が全く無い。

その約一秒後。ある程度離れた場所から「ゴシゴシ」とくらものコンクリートの塊同士がぶつかる鈍い音が聞こえた。

「あれー？どこ子だろ？止めなきやいけないよねー？」誰に話しかけるわけでもなく、そう独り言を言つた壱はさつき一度戻した右足をもう一度、前に一步出す。そして上半身だけを回し後ろを一度振り返り少しそこにいた一人に言つ。「くる？」鈴は頷き歩きはじめるが、美希はまだ粉末が取れないらしく目をこすっている。

そんな事とは関係なく一度目の爆発が起る。

ドゴン。と、鈍く乾ききつた音が響く。コンクリートが砕け、弾け、ぶつかり合つ。そんな音が重なり合つた音。その後、一秒と空けずに爆風が訪れるが今回は三人とも目をつぶるなどして直接的なダメージをほぼ押さえる。

「あーあ。あんなの止められるかな？」目を開け少し離れたその通りを見て不安げに。しかし明るく。壱はそんな言葉をつぶやく。「？」鈴はまだ今から壱がやる事にたいしても見当が付かずただついて行く。しかしそれ以前に鈴はまだ 今起こつている事さえ理解できていない。

「まつてー」そう言いながら美希が走つて追いかけてくる。「あつち危ないよ？」

「なんで？」

「だつてほら」そう言い美希はある場所を指差す。その先はさつきまで大通りにある少し高めのビルが建つていていたところ。しかしそこにはもうビルは無かつた。

「ん？んー？」その先を鈴は眺め、そして考える。美希が何を指し

たいのかを。それに気づき苦笑いしながら声を上げる。「あ！」数秒間が開く。そして「壱さん？」口調こそは変わらない。しかし焦つてしているのは見て取れた。

「なーにー？」

「あれって？」汗が顔を流れ落ちて行ったのが解つた。

「んー。あれもたぶん魔法なんだよねー」

「・・・・」言葉が途切れた。その時鈴は思つ。ふぞけた言葉とは裏腹に。自分が今、踏み込もうとしているその場所が実は自分が思い描いていたほど楽な世界じやないのだろう。と。それどころかとんでもなく危ない世界なのだろう。と。

それを自分の心に浮かべた瞬間鈴は何かを言おうとする。しかし何も言えなかつた。いやそれは少し違つ。言わなかつた。おそらくその表現が正しい。

鈴はいつもの自分だつたらここで迷わず帰つて行く事は解つた。しかし今そうしようとは思えなかつた。それがどこから来るのかははつきり言つて、解らない。だけど『帰りたくない』『いじ』で引き下がりたくない』と思えた。

しかしそれが壱にその今、自分が問おうとしている事を解いた瞬間崩れ去るような気がしてならなかつた。

だからこそ数m前にいる壱に向かつて何も言わずに踏み出した。「まだ付いてこれる？」歩き始めた鈴に対し振り返り壱は意味深い言葉を発した。

「もちろん。」笑みを浮かべ、まるでそのまま答えるのが当たり前かのように鈴はそう答える。

「美希ちゃんは？」それを。同じ意味を持つその問いを今度は鈴の数mさらに後ろにいる美希に問つ。

「なんで？」数秒開く。そしてまた美希が口を開く。「鈴ちゃんがいくんだもん。私だつて行くよ？」同じ意味を持つ言葉でも二人に對し起した現象はだいぶ違つた。だが一人とも出した答えは寸分違わぬ物だつた。

「そつか」ついてくる一人を見てそう言い体の正面を通りに向ける。そして、歩き出す。

3

五分ぐらいで三人はその大通りに出た。そこには一人の男がいた。黒髪で身長が160?。普通の一般人と言ひイメージを受ける。とくに特徴もないその人物。その男がこつちに足を進めながら喋り出す。

「あなたが『ケイジさん』ですか?」三人を見てそう言つ。妙な片言の日本語だつた。しかしその男は見るからに日本人。その言葉はからかつているようにも思える。そして続けて話し始める。「おつー!失礼シまシた。自分が名乗るのが礼儀ですよネ?」それを聞いていて三人は何も言わない。そしてその男は話を続ける。「私はアーサー・エドワード・ウェイトと言つものでス。それでお訪ねしますガ、あなたお名前ハ?」

アーサー・エドワード・ウェイト。1850年後半から1942年ころまで実在した魔術師。薔薇十字友愛団の創設者でウェイト版タロット製作者の一人。

これが壱の知つてゐるアーサー・エドワード・ウェイトにたいしてのすべての情報。壱は名前を聞いただけでそこで何が起こつてゐるかの大の方を理解する。だからこそ壱はウソをつく。

「私が圭二」。だけど何の用?ウェイトつて昔の魔術師でしよう?そんな偽名まで使って。あとできるなら町を壊すこともやめてほしいな。魔法使いさん?それと同時に壱はポケットに両手を入れる。「偽名じやないのですが。ま、それは後でいいでしょ。それでケイジさん、一緒に来ていただけないでしょ?来ていただけないのなら力ずくでモ。と、言う事になつてシまいまス。できるならこちらモこれ以上の被害ハ出したくないのですが。あと私は魔法使いじゃなく『魔術師』ですヨ?」まだその男は足を止めず、近付いてくる。

「んーなんで私があなたについて行かなきゃならないの?私を誘拐

でもする?」 そう言いながら壱は右手をあごの少し下で手前。ちょうど胸の上で広げ自分を指す。「このかあーいー美少女、誘拐しちやうー?」 喜んでいてそれを隠しているような動作を見せた。たぶん冗談だ。そのとんでもなく上機嫌からなる言葉に対し壱の後ろにいる一人はそう思つ。

「私は依頼されまシテネ。依頼主はあなたを連れてコイと言つていいのですヨ。どうシマス? 戦いますか? 逃げますか? それとも投降でモしまスカ?」

そのおそらく冗談であるその言葉をほぼ無視し、そのウロイトは魔術師は壱に問う。

「んー」 そう言つて壱は真上に紙を放り投げる。それは開いたまゝなのにもかかわらず10m近く上空まで飛ぶ。それとほぼ同時に魔術師の足も止まる。

三人がその紙を見ている間に壱はそこから消えた。そして空から声が聞こえる。まるでメガホンでもつかつているようなそんな声。「私を倒せたら、ついてつてあげてもいいよー? あと逃げはしないから安心してねー。あとふたりは安全なところにいてよー?」 もう一度空を見る。しかしそこには紙が一枚空気の抵抗を受けゆらゆらと落ちてきているだけでそれ以外には空しかない。

「「じやかしい事をするモのですネ? ケイジさん?」 そう魔術師はつぶやき一度止めた足を逆の方に向け進める。

魔術師は数メートル進み道路と歩道の間にある車にたいしての標識をつかむ。そうするとまださびてさえいないその鉄パイプが手と地面の真ん中あたりでちぎれる。その魔術師が怪力なわけではない。しかしその鉄パイプは音も立てずにちぎれる。そしてその手に持たれている鉄パイプがみるみると形をえて行く。その手が触れている場所から上下5? 位ずつに変化はない。

それより上はまるで潰したかのように薄くなり一辺5? 位の長さがある菱形になつて行く。そして長さも縮まる。

もともと2m近くあつたそのパイプと標識は30秒とかからずにな

剣になつた。全体は銀色で統一され、デザインは中世ヨーロッパなどの戦争のイメージに出てくる剣その物だつた。

「さあーて」そう言いその魔術師は剣をわきに挟みポケットをあさり始める。「やんちゃな子には、お姫様とテお仕置きガ必要ですネ？」そう言いポケットから煙草とマッチの入つてゐる箱を取り出し一本、煙草をくわえ他のたばこはポケットに戻す。そして箱からマッチを一本取り出し火をつける。その火を煙草に移しマッチを捨てる。そして斜め前にあるビルの一つの4階窓際をにらみつけた。

4

一分ほど前。壱は魔術師の斜め後ろにあるビルの中にいた。そのままはちょうど魔法を使い、メッセージを伝え終わつたところ。

窓の下で魔術師からは陰になつて見えないところに腰を下ろす。そしてため息をつく。「い、こ、こ、殺されるかと思つた！」それを言い壱は一度息を落ち着ける。「だけどウヒトイつてあの人、圭二に何する気だろ？ それに相当強いし、まともに戦つて勝てるわけ無いよねー？」そう言いながら周りを見回す。「ん？」そこはどこかの会社のオフィス。日曜とはいえ誰もいのいのは不審に思つ。それとさつき爆発が起きたのに全く人が騒ぐ声は聞こえなかつた。人がいない。か。だつたら・・・

そう言いもう一度魔術師の方を見よつとする。しかしその瞬間まるでその部屋の温度が一気に下がつたようなそんな感覚をおぼえる。

声を上げる事さえできなかつた。しかしゆつくりと魔術師がいた方を覗く。少し場所は変わつていたが魔術師は右手にさつきまでは持つていなかつたはずの銀色の剣を持つていただけで大して変つてしまはなかつた。それをわきに挟み、煙草をくわえ、時代遅れなマッチでその煙草に火をつける。まだ火が付いているマッチを下に落としこちらを睨みつける。

「やつぱいっ！」そう言つすぐその窓際から離れる。

しかしそれとほぼ同時に外では地面に響くよつたさつきまでとほ

ぼ同等の大きさの轟音が鳴り響く。魔術師がその立っている場所を爆発させていた。それと同時にビル街近くの窓はほとんどが割れる。足元全体を爆発させたわけじゃない。魔術師は足元のアスファルトを円状にくり抜き、厚さ10?の内、下の3?くらいと回り半径1mを爆破した。そうすることで浮かび上がる距離は有に地上4階の高さを超す。

上空で一瞬止まり徐々に高度が落ち始める。しかしそのスピードと大差なく壱がいるそのビルにも近づく。

4階。壱がいる場所。今はまだ必死に逃げようと走って出口に向かっている途中。そこにキン。と、鉄と鉄が擦れあう音。そんな音が響く。

そして壱は後ろを振り向く。そこにはあるはずの窓枠がなくなつていて代わりに一人の男が件を下に突き刺し、しゃがみ込んでいた。「また会いましたネ？ケイジさん。」そう言い笑みを浮かべると一瞬にして魔術師は壱との距離を詰める。その時点で距離約1、5m。完全に剣の攻撃範囲内だ。左側に押しつけていた右手」とまるで鞭のように振り壱の上半身を真つ一つにしようとする。

しかしそこにはもう壱の体はない。のけぞるような形でその一太刀をかわしていた。勢いよく後ろに引いたせいか力があまり、後ろに跳ぶ。しかし壁には当たらない。宙を浮いていた。壱はそのままガラスを破り外に放り出される。しかしその一瞬。服のどこかに忍ばせてあつたのだろう手榴弾を右手に握り、左手でピンを抜き自分が放り出された窓からビルの中へと投げ入れる。

物騒。その言葉がしつくりくるその道具は魔法使いの常備が義務付けられている物の一つだ。もし魔法使いが何か問題を起こした場合、それは兵器や銃器より魔法の方が解決しやすい事が多い。そのため『もめご』とは各自で対処』と言う感じの法がある。

当時その法が成立すると今度は魔法以外にも一定の武装の許可を求める声が膨れ上がった。しかし許可は下りずその代わりにそれが義務付けられる事になった。

そのため壱が持っていたその武器。それが今音を立てながら一度バウンドする。そして爆発。

轟音と共に周囲に撒き散るその爆風は壱をさらに飛ばし道を挟んで向かいの10m近く離れているビルに放り込む。

ガラスを突き破り建物の中に転がり込む。立とうとする。その時、体全体いくつもの場所から痛みを感じる。今の今まで無かつたものだ。おそらく転がり込んだ時ガラスでもつけた物なのだろう。

「たついなー」立ち上がり窓から外を見る。向かいのビル一つ上の階からは、いまだに煙が上がっている。壱はズボンの後ろのポケットからボールペンを取り出す。くるくると回しながら近くにあつた事務業務用の机に何かを書いて行く。一重の円。その中に上下逆にある程度、間隔をあけて正三角形が収まっている。それを壱はバン、と右手で叩く。そうするといくつかの大きな音を立てながら形が変化していく。5秒。その間に事務作業用の机は形を変え別なものへと変化している。剣だ。さつき魔術師が持っていたものとデザインはほぼ同じ。違うと言えば少し柄の部分が少し長く、さらに全体的に一回り大きい。その剣は銀色に輝きを放つ。「もう、死んでるかもしれないんだけどねー・・」

しかし唐突に何かが向かいのビルから飛び出す。残念ながらの予想どおり。魔術師。その男は銀色の剣を両手で握り大きく振りかぶつて壱に襲いかかる。

「くつ！」壱が剣を盾にし、その一太刀を抑えきる。

「やりまスね？」魔術師はにやりと笑い半分バカにしてそう言う。

無理やり剣を振り切り壱を飛ばし自分も少し下がり5mくらいの距離をとり剣を構えなおす。両方ともまだ攻撃範囲にはある程度の距離がある。「武器は大キな鎌と電撃ダと聞いていたのですが。剣も使工のですね？非常に面白い。面白いですヨ？圭一さん。だから私もここからは手加減はしませんヨ？」それと同時に魔術師は自分の立っていた地面をけり出す。腰を下げ低い姿勢で壱の懷に踏み込む。やつきと同じように右腕」と体の左に巻いていた剣を勢いだけ

で振り上げる。それに対し壱はそり返りそれをかわす。

「くつ！」何かに気づき壱は声を上げようとする。しかしそれは何の意味も持つ事は出来ない。

拳。それが完全にそり返っている壱の背中をはじきとじばす。いくら戦闘ができると言つても女性。魔術師のはなつたその拳でやすやすと体が宙に浮いた。魔術師が体勢を立て直すスピードとほぼ同じに壱の体は上昇する。1、5m。ちょうど魔術師の目線に当たる所まで壱の体が浮く。その無防備な体、腹に魔術師は剣ではなく肘でエルボーを入れる。

一瞬でいいまで上昇するだけだつた壱の体が鈍い音を立てながらコンクリートにたたきつけられる。「がつ！」壱が思わず声を上げる。そして目を開けるとその目の上には剣があり、今にも魔術師はそれを突き刺そうとしていた。壱は体を転がしギリギリでそれをかわす。そして体制を立て直す。

体を起こし、しゃがみ込んだ状態にした時。背中に何かが当たつたのを感じる。そこには壁があった。「ん！」何も言う事は出来なかつた。その魔術師の突きが壱の頬をこすり、後ろの壁を貫き刺さる。その時、壱の瞳には魔術師の顔が移された。わざとか偶然かさえ分からぬが魔術師の突きが外れたその状況。しかし魔術師は不気味にも笑みを浮かべていた。

まだ魔術師が放つた突きは止まらない。それどころか魔術師が剣を突き刺したその壁は音を立てながら崩れ始める。さらに壱を巻き込みながら魔術師は大通りに對して並行にあつた道に放り出される。「クつ！」その言葉と同時に魔術師は手のひらから何かを放つた。そのせいいか壱はさらに飛ばされる。しかし魔術師はそれで体勢を立て直す。

一人は地面に着地する。同じような能力を使ってだ。着地したのはちょうど道の両側で二人の間に距離が10m近くある。そこで初めて一人が足を止め睨み合う。その瞬間、魔術師の周りにゴツゴツと音を立てながらコンクリートのかけらが落ち始める。しかし魔術

師は目線をそらさない。そう思つた瞬間だつた。魔術師がその場から消えた。何かを感じ取り壱は真上を見上げる。4、5m上。そこには両手で剣を振りかぶり、今にもそれを振りおろそうとしている魔術師がいた。紙一重で壱はそれをかわす。そして右足を魔術師の真横のあたりまで踏み込みそしてその剣を両手で勢いよく薙ぎ払う。しかし魔術師は後ろに2、3度跳ぶ。それで一気に壱との距離を広げその剣の攻撃範囲から逃げる。そこからは攻防が一転し壱が攻めに回る。魔術師は大半の攻撃をかわし不可能となり場自分の持つ剣でその攻撃を止める。

「どうしたの？魔術師さん？」バカにしてただ壱の攻撃をかわすことしかしていないその魔術師に壱は言つ。

「私がタだかわしテいるだけだトでも？戦略とは大事なものですヨ」そう言いながら魔術師はまだ壱の一撃をギリギリでかわす。「あナたもナかなかの魔術師だ」また一つ今度は帰つてきたその刃を魔術師はかわす。しかし壱は手を止めようとはしない。そして壱はそこで完全に道路を渡りきる。今二人がいる場所はもともと魔術師が立つていた場所だ。今度は壱が剣を斜めから降りおろす。しかしそれも当たらない。しかし目線は下に行きそこに落ちていた何かに気づく。「私ヨリ下。し力し強イ。だかラこそけ栄ヲ評してコレを使わせてイただきまス。」そう言い魔術師は一歩踏み込む。そして片足を壱の後ろ脚を軽くけりバランスを崩させ前に出るしかない状況にする。そして斜め後ろに回つた魔術師は剣を握つていない左手を差し出した。そこには何かが書かれていたしかし確認する時間など無かつた。壱はすぐに対応に出る。しかし到底それが間に合つことなどあり得ない。そこでは壱の真下に一つのカードが落ちていた。何やら魔法人らしき模様が描かれたものだ。そして一秒とたたずそれが爆発した。

五秒後。壱は爆発のあつたその場から飛ばされ今やつとで立ち上がりつたところだつた。

「いったいなー」そう言いながら周りを見回す。そうすると5m先。土煙りの中。そこには人影があった。そしてその影は一步また一步とこっちに近づく。乾ききった足音を立てながら。

「まだ生きてました力。さすがですね?」その言葉と同時にその人影が何かを投げたのが解った。

剣。魔術師が放ったそれは壱のさつきとは逆の方をすれながら通り抜けて行く。軽くかすったその頬からは血が垂れ始める。

轟音。壱の真横を剣が通りすぎてから1秒とたつていなかつた。爆音にも似たその音の次に今度はコンクリートがぶつかりあう音が聞こえた。その時、壱は想像してしまつ。『本当に魔術師が狙つたのは自分ではなく大通りにいた一人なのではないのか』と。

だからこそ反応が遅れた。

だからこそ間に合わなかつた。

優しかつたからこそ負ける。

壱はそうなる事。それが油断だと言う事も解つていた。しかし優しかつた。だからこそ次の一撃をくらう事になつた。

「甘いですよ?ケイジサン?」そう言つ魔術師はもう壱の正面にいた。そこで体制を低く右の拳を握りそれを腰から上を回しその拳を壱の脇腹にたたきこむ。その壱の体はさつきの剣で穴が開きもろくなつた壁などやすやすと破つた。そしてそのまま壱の体は大通りの道路近くまで飛ばされる。そしてそこから転がる。そして道路の中心あたり。そこでやつとで止まる。その土煙から放り出されたボロボロの壱を見てそこに一人の少女が走つて行つた。

「壱さん!」美希だつた。魔術師が放つた剣とは全く別の場所にいた美希。美希は走つて壱の所へ向かう。何ができるかなんてわからない。ましてや相手はまだ武器を持っているかもしれない。魔法も使える。しかしだ後ろにいる事などその少女にはできなかつた。

走つて壱に向かう美希にたいしてまだ鈴はただ美希の後ろで唚然としているだけ。まだ何もすることもできなかつた。そして美希は壱のところまで行くとしゃがみ込みあおむけになつてゐる壱が氣絶しているだけなのを確認し、まず一息ついた。

「んー」砂煙の中からそんな声が聞こえてくる。「その人ハ」コツコツと硬い靴底がコンクリートをたたく音と一緒にだ。「ケイジサンではなかつたのですカ?」足音が止まる。一人のだいたい2mくらい離れたどこからだろう。

今起こつた物事を理解し、自分が何もできないことくらいは解つていた。しかしどうにかしようどその一人のいる場所に鈴が走りだす。

「動くな」静かに魔術師は言つ。それはすぐに鈴の耳に入り歩き始めたその状態で動きが止まる。「私の質問二答えてもら工ませんかネ?」沈黙。それが十秒ほど続く。そして再び魔術師は話し始める。「まずハじめ二聞きマしょウ。その人ハ『ケイジジサン』ではな力つたノですカ?」

なぜそうなつたのかは知らない。しかし美希は涙目で魔術師を睨みつける。目をつむり大声で言つ「この人は壱つて人だもん。なんで、なんで壱さんがこんなボロボロにされなきやいけないの!壱さん何にも悪い事なんてしてないでしょ!それなのにこんな・・・もう帰つて!帰つてよー」まるで泣きつくように涙をぽろぽろと流しながら美希はそう言つた。しかしその少女はその涙が恐怖から来るものではない。そんな気がしていた。

「そうですか。まあ、いいでしょ」そう言つと魔術師は逆の方に数歩歩く。そしてその数歩ののち魔術師はそこから消えた。その瞬間魔術師に叫び付けた美希の肩の力が抜けた。それとほぼ同時。それを感じ取つたように鈴が走りだす。壱の後ろまで行くと肩に手を乗せ『大丈夫か?』と聞いてくる。

「うー」何か言おうとしているのが解つた。ついさっき泣きやんだばかりなのに美希はまた、泣きり出す。「こわかった。こわかった

よー」泣きながら鈴の足に抱きつき美希は言つ。

何も言わず鈴は美希を見て思う。『美希はすこいな』と。『自分はそこまで行けないんだ』と。そして一度笑みを浮かべると美希は見る。

「わかった。だからまず先にまず壱さん運ぼう?」そう言い、しゃがみ壱の左腕を持ち担ぎあげる準備を整える。まだ泣きやむことさえできない美希は涙を服でぬぐいながら鈴のそれに頷く。

そして一人は壱を担ぎ今来た道を戻つて行く。

6

マンションまで戻つてきた。今ちょうど一つ目の自動ドアをぐぐりそのある程度のに広さがあるそこにいた。そこで一人は重大な事に気づく。

部屋のロックの解除の仕方が解らない

二人同時にさつき呼び出しに使つたインター ホンを見る。
固まつた。そのちょうどボタンを押しやすい高さに斜めにカットされたシャレているデザインの岩の上面にはカードか何かをかざすためにあるのだろうスキャナーや呼び出す際の部屋選択用のボタン、部屋からその人物を確認するためのカメラなどが埋め込まれていた。だがそこから策など一つも見つからない。だからこそそこから動きが消えた。さつきまで死の境界線あたりにいたとは思えないほどのが抜けた空気だった。しかし一人はどんでもなくまじめだったのは言つまで無い。

30分。次の人がそこを通りまでの時間だった。その30分間そこからは完全に動きが消えていた。当然、三人もそこから全く動かない。そして一人の耳に後ろから不意に人の名前が入る。

「壱?」

二人が降り返るとそこには少し自分たちより年上くらいの少女がいた。外国人なのだろうか、髪は長い金髪で瞳は明るい緑色。かな

りの美少女。だが真つ先につくイメージはその『美少女』ではなく服装だった。ドレス。真つ白なデザインでスカートが一般的なイメージより短め。しかしその飾り付けから真つ先に受けるイメージはドレスだった。その少女は一人が背負つていた女が壱である事に気づくと肩にかけていたハンドバッグを落としそこまで走る。そしてぼろぼろでそれでも息がある事を確認すると「あなたたちは?」と問い合わせる。言葉は冷静だった。だがその少女があつせつているのは見て取れた。

「美希です」振り返りその少女を見て美希は名前を名乗った。
「いやそうではなく、なんでこんな事になつて・・・」

正面をその少女に向け美希は話し始める。「えつと。さつきあつちで」そう言いながら美希は大通りの方を指す。「なんかアーサーって言う人と戦つてそしたらボロボロにされちゃて・・・」なぜか美希は涙目になり始め今にも泣きだしそうだ。

一度息を落ち着けその少女は言う。「だいたいの事情は解りましたわ。すみませんが病院まで運ぶの手伝つてくれます?」一人は少女のその言葉に頷いた。落ち着いたからなのか口調が変わつていた。普通にあり得ないと思つた。こんな口調の人が現実にいるとは到底思えなかつた。だけど頷いたその一人の前にいる少女は確かにそんな口調でしゃべつていた。

30分後。四人のいたのは近くの病院。そこは6階建てで見た目はマンション。どこから見たつて外見では病院には見えないし大っぴらに病院と機能しているわけでもない。無免許と言うやつだ。基本的に表ざたにできない大きがなどの手当をしてくれるところだが普通に比べて治療費が5倍近くかかつたりする。その病院の待合室。そこに美希、鈴とさつきのドレスが参入並んで座つている。そしてそのドレスの少女が話し始める。

「えーと。あなた方が壱と一緒にいてそのジルと言つ人物に襲われたのは解りましたわ。そこで質問なのですがなぜあなた方は壱と一緒に?」

「圭一さんがしばらく圭さんのところで魔法教わっててって「そう鈴が言つた。そうするとそのドレスの少女は目をつぶり急にわなわなしながらつぶやく。

「まつたあの方ですーのー?」横を見る。そうすると一人の少女が引いてのが解つた。そこで一度息を落ち着けそしてまた話し始める。「失礼。少し取り乱してしまいましたわね?」ちょうどそれを少女が言つた時だつた。ちょうど奥の診察室のドアを開く音が聞こえる。そしてコツコツと足音を立てながら一人の女性が出てくる。白衣をだらしなく着た女性だ。その女は頭をかきながら3人の座っているところえ歩き進める。そして正面にしゃがみ、「なんでさーあんなことなつたの?」そう言にながら女はポケットから煙草とライター取り出す。

「それが襲われたらしいんですよ」

まだ少女は話し続けるがそれを聞き流すようにして女はライターを左手から右手に移し、その手で煙草の入つている箱の穴があいている方とは逆の方を軽く指で何度も叩く。そうすると何本かが穴のあいている方から出てくるその中で一番背の高い煙草をくわえそのままその中から抜き取る。そして左手を煙草後ポケットに突つ込み煙草を中に置き、そして左手を口の周りに当て右手に持つたライターで煙草に火をつける。それをくわえたまま一度息を吸い、煙草を右手の人差指と中指で挟み抜き取り横を向いて行きごと煙を吐く。そして言つ「まーあんたがたの難しい話はいいんだけど、けっこ一重症だよ?右足脛の骨折、あばらの1~3と、あと6、8が折れて右手の人差指と子指の完全脱臼。左肩もだけどあれはまだびみよーにくつついてたから亜脱臼。あと打撲が10ヶ所くらい。そして顔に切り傷が二つあつた。まーそれだけは血も止まつて処理の必要無いだろうけどね。」

「どれくらいで、治りますの?」

「半年ぐらいかな?で、入院する?」嬉しそうに言つ。

「いくら、かかりますの?」静かに、悔しそうに少女は言つ。

「治療費、診察費、入院費その他もろもろ混せて『特別に』完治まで500万！」悔しがる少女とは逆にその嬉しそうに女は言つ。その金額に対し少女の横に座りその会話をただ聞くだけだった二人はただただ驚くだけ。

「仕方ありませんわ・・・」そう小さく少女はつぶやく。

「まーいどありー」嬉しそうに女が笑つて言つ。

一度ため息をつき少女はポケットからどつかの金持ちのおばさんとかが持つていそうなでかく分厚い財布をハンドバックから取り出す。そしてその中からまたこれまた金持ちとかしかもつていない黒色のクレジットカードを取り出す。基本的にこれで買えないものは無いらしい。（一括払い）

「はい」そう言い少女はそのカードを差し出した。

女はそれを受け取らず言つ「あー支払いは退院する時でいいよ」少女はそれに『そう』と応えカードを財布にしまいその今カードをしまつたでかい財布もしまう。ちょうどその時ハンドバックの中から携帯の着信音が鳴る。少女はその着信音を放つ携帯電話を取り出しながら立ち上がる。折りたたまれたそれを片手で開き誰からの物か確認すると「失礼」と言いその部屋の出入り口に向かう。その参入から少し離れた場所で通話ボタンを押しその携帯のスピーカーを耳に当て言つ。

「もしもし」

『田中か？仕事入ったんだが出れるか？』スピーカー男の声が聞こえてくる。

「ええ。出れますわ。どんな仕事でして？」

少女がそんな会話をしている時。女医らしきその女は一人の隣に座り話しかける。

「えーと君たちは？」

「圭一さんの弟子！」美希が答える。

「名前は？」少し困ったような仕草をしぬきなおす。

「私は美希。そしてこの子が」そう言いながら美希は隣にいた鈴の

肩をポンとたたく「鈴ちゃん」

「そつか。私は舞。医者やつてるんだ。よろしくね？あと、あの子の名前って聞いた？」舞がそう言つと一人は首を横に振つた。

「あの子は田中クリス。あの子この名前、嫌いみたいでね。自分から名乗ることはめつたにないんだ。だけどハーフですんごいお金持ちの家の子なんだよ？」ちょうどその時。舞を見ていた一人の表情が固まつた。そして舞は後ろから声が聞こえてきた事に気づく。

「あなたつて方は・・人の事をべらべらと・・・」

驚き。恐怖。その一つの感情が頭の中に浮かぶ。そして後ろを振り向こうとした瞬間。頭上にクリスの放つた手刀が直撃する。そして今、何かを喋るために開けた口が音をたて勢いよく閉じる。顔ごと床にたたきつけられて。それとほぼ同時もともと言おうと思つた言葉とは違う言葉が漏れた。

そして床にたたきつけた本人。クリスは床で伸びている舞を確認し、二人に話しかける。「あなた方。ついてくる気はあります？」完全にびびり舞をただじつと見つめていた二人はその言葉にビクッと反応した。そして一人は同時にクリスの顔を見る。

「仕事の依頼がきましたの。『魔法使い』としての仕事のね。もし魔法使いになりたいのなら絶対に避けてはと通れない道。ですが今ならまだ引き返すこともできる。どうします？ここで魔法使いをあきらめてすべてを見なかつた事にするのか。それだつて今ならまだ不可能じやない。そしてこの後の事を考えれば誰も攻めないでしょうしね？壱の戦闘を見ているのならあなた方もそれはわかるでしょう？」

その言葉と同時にそこに沈黙が流れた。そして数秒置き、クリスはまた話し始める。「だからできるなら私はそちらをお勧めしますわ。だけど、どうしても魔法使いを目指したいのなら今から3時間後。午後5時に壱のマンションの前に来てください。そうしてください。壱の来るまでの間、私が魔法をお教えさせていただきますわ」言いたい事だけ言うとクリスは『それでは』と残しそこを立ち

去る。

しばらくそこにいた3人は動かなかつた。1名を覗いて動けなかつた訳じやない。しかし動かなかつた。壱のマンションに向かう事もなく。ここから帰る事もなく。ただ一人はおびえることしかできなかつた。自分が進もうとしているその常識とかけ離れた道に潜む恐怖に。だがここならまだ引き返す事が出来る。しかし引き返そとは思えなかつた。見栄とかそんなくだらないものではない。好奇心などのような 前向きなものでもない。しかし引き返そとと言う選択肢は取れなかつた。

約三十分後。一つの叫び声と同時にそこにあつたか完全な沈黙が破られる。「りやーう」その意味不明な雄叫びを聞き隣に座つて真面目な顔をしていた鈴は思わず笑みをこぼす。

「なんだ? その雄叫びは?」まだ笑いを止める事さえできないまま鈴は言つ。

「んー。だつてこのままここにいたつて今はもう意味無いでしょ? わたしはそつだよ? 鈴ちゃんもそつでしょ?」美希は立ち上がり鈴の前に立つてそう言つた。

「そつだな」そう言ひ鈴もそこから立ち上がる。

美希はそれを見ると出口に向かつて歩き出す。数歩行つて振り返る。そこでまだ一歩も出でていない鈴を見て言つ。「じゃ、お昼食べに行こう?」

鈴は何も言わずに歩きだした。

7

ほぼ同時刻。三人のいる場所から距離にして2?ほど離れた駅。その駅のホームにクリスが走りこんでくる。そして今、電車がホームへ到着する事を告げる放送が流れる。

キイイと高い音を発しながら電車はちょうどクリスの目の前に自動ドアを置き停止する。完全に停車すると片側一方のすべての自動ドアが開く。そのうちの一つからその電車に乗る。中には言つて周りを見、開いている席が無い事を確認すると近くにあつた手すりに

寄り掛かる。それから数分で電車は発進する。動き始めるときに一度クリスはバランスを崩すが手すりにつかまり体を支える。そして今度はしまつたドアに背を預け、肩越しに外を見る。それと同時にさつきの事について少し考える。『もうあの子たちは来ないのでしょうね。しかしあの子たちはなぜ圭二に誘われたのでしょうか？何か意味があつたのでしょうか？もしかしたら私は間違いを起こしたのでは？』とかそんな感じにだ。

ここで圭二の名が出てきたのは一人が知り合いだから。しかしながらクリスが一人が圭二に誘われた事を知っているのか。この事はここまで一人ともクリスには話していない。だがそれは容易に見当がついた。『一人が圭二の弟子と名乗つた二人は壹と一緒にいた圭二は実力が無い限り自分への動向をさせない 何かの事情があり二人を魔法の世界に引き込んだが実力が無いからある程度、力が付くまで壹のところに預ける』と言う感じにだ。

そして一度ため息をつく。そして一言つぶやく「どうしまょう・・・」焦つて いる。と、言つよりもただ単に暗い印象を受ける表情だった。

～第一章～少女・魔法・魔術（後書き）

レビューや感想、誰かくれませんでしょうか？

と、書つよりも誰でもいいのでお願ひします書いてください。
なにぶん一人で書いている者でどこが良くてどこが悪いのかわつ
ぱり解りません。

とにかくかつたといひも悪かつたといひも、どちらなら理由を
つけたレビューや感想ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7837/>

俺伝説～超能力英雄伝～2 二人の少女と魔法と二度目の世界

2010年10月12日02時28分発行